

## ヨハネによる福音書 5章31～47節

今月は、前回 5章19節以下からの続きです。

19節は、「そこで、イエスは彼らに言われた」と記しています。ここで言う「彼ら」とは、ユダヤの指導者たちのことです。イエスが安息日に足の不自由な男を癒やしたのを安息日の規定に反すると言って咎め、それを口実にイエスを亡き者にしようと殺意を強めていた者たちでした。その彼らに向かって、イエスが答えて言われた。今月は、その返答の後半部分になります。

状況はしだいに、緊迫の度を増しつつありました。殺意を抱いたユダヤ人たちは、イエスに迫ります。あれやこれや、それほど大それたことを言うからには、その根拠を示せ！ イエスの言葉はこれに答えて語られたものでした。

「もし、わたしが自分自身について証しをするなら、その証しは真実ではない」(31)

- ・イエスは「もし、わたしが自分自身について証しをするなら・・・」と語って、今月の箇所を切り出されます。
- ・それは、私たちの常識からしても理解できるでしょう。自分で自分のことを証言しても、どれほどの人が信じるでしょうか。
- ・ユダヤ教の教師らも、自己弁護の証言は信じるに値しない、と強調していました。
- ・それは、人間の本質を踏まえたものでした。私たちは、いかに自分を律しても、自分可愛さから、保身の思いについ心を許してしまうからです。
- ・加えて、事が真実なら、当人の言葉以外にも何らかの証言や証拠が存在するもの。
- ・かつ、そこから何事かが起こって、そこにながしかのしるしが見られるもの、というわけです。

### イエス御自身に対する証し

- ・そこで、イエスは御自身に対する証し(証言)を持ち出されます。
- ・「バプテスマのヨハネ」と「聖書」と「モーセ」の証しです。

#### 1. バプテスマのヨハネ(33～35)

- ・まず、「バプテスマのヨハネ」について、イエスは33節で次のように言われます。「あなたたちはヨハネのもとへ人を送ったが、彼は真理について証しをした」。これは、1章に「エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わして、『あなたは、どなたですか』と質問させた」(1:19)と記されている、その時のことです。
- ・ですが、これに続けて、イエスはこうも言っておられます。35節、「あなたたちは、しばらくの間その光のもとで喜び楽しもうとした」
- ・つまり、ユダヤの指導者たちは、余興のネタのようにしてしばし、ヨハネの話題を楽しんだ。け

れども、ひとたび自分たちが批判的にされると、一転、ヨハネを迫害して捕らえたからです。

- ・それは、彼らの何を — どんな人となり — を表わしていると言えるでしょうか。
- ・35 節の前半を見ると、「ヨハネは、燃えて輝く<sup>あか</sup>ともし火であつた」と、(未完了) 過去形 (<sup>エーシ</sup>ἦν < <sup>エイミ</sup>εἶμι) で語られています。このとき、ヨハネはすでに処刑されていたのでしょうか。
- ・バプテスマのヨハネは「ともし火」でした。イエス・キリストに至る道の足もとを照らし、そうすることで <sup>まこと</sup>真の光を指し示した<sup>あか</sup>灯りでした。
- ・しかし、ユダヤの指導者たちは、そのヨハネが語ったメッセージの中身には耳を貸しませんでした。

## 2. 聖書 (39)

- ・イエスは 続いて、「聖書」を持ち出されます
- ・当時 聖書と言うとき、それは現在の旧約聖書を指しますが、イエスはその聖書を指して、次のように語られます。「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて<sup>あか</sup>証しをするものだ」(39)。
- ・ユダヤ人にとって 聖書は何より大切なもので、そのリーダーたちは、そこに記された神の戒め「律法」を熱心に学んでいました。
- ・しかし、それが、イエスの言われたように、いわば「研究」に傾いていきました。戒めを分類し、それらを細かに規定して、詳細な体系に整理する、などなど。
- ・すると 通常、何がどうなるでしょうか。
- ・つまり、本来の学びと単なる研究との違いははたして 何でしょうか。
- ・そもそも 旧約聖書は、歴史に働かれる神が苦闘の出来事を通してイスラエルの民を育み育てられた恵みの記録、と言えるでしょう。
- ・そのようにして、いつの日か、神の御旨<sup>みむね</sup>をその身に負い、<sup>まこと</sup>真のいのちの在り<sup>あ</sup>処を身をもって示す救い主が来られることを告げる書。それが旧約聖書のはずです。
- ・だとしたら、それは誰を指し示して、誰のことを「証し」するものでしょうか。
- ・そして、それが分からないとしたら、それはなぜなのでしょう？
- ・イエスは 40 節で、こう言われています。「・・・は、命を得るためにわたしのところへ来ようとしなさい」

## 3. モーセ (45~47)

- ・そして、あと一つの「モーセ」に関しても同じでした。
- ・モーセは旧約聖書の象徴として引用されますが、とりわけ神の律法を授かった者として、また神の律法を教えた者として引き合いに出されます。
- ・なかでも <sup>じっかい</sup>十戒は「モーセの十戒」とも呼ばれ、旧約の律法全体の中心に置かれています。
- ・ユダヤの人々はこの十戒を最大の戒めとして モーセの律法に敬意を払い、それらを大切にしました。
- ・ですから、彼らが神の前に立たされたとき、他の人はともかく モーセだけは自分たちを弁護して

くれる、と信じていたのです。

- ・ところが、イエス曰く、「わたしが父にあなたたちを訴えるなどと、考えてはならない。あなたたちを訴えるのは、あなたたちが頼りにしているモーセなのだ」(45)。
- ・ユダヤ人にとって、これは文字どおり <sup>せいいてん</sup>青天の霹靂<sup>へきれき</sup>だったにちがひありません。
- ・しかし、十戒に始まる律法を、彼らは人を裁き、と同時に 自分の評価を上げるための道具にしてしまっていました。
- ・十戒はそもそも、見た目の表面的な言い回しの裏に 神の真意が秘められた戒めではないでしょうか。それはたしかに、禁止の言い回しが目立ちます。けれども、その底には 神の真意が・・・。
- ・それは、
  - ①人を神とせず、また自分をも神とせず、神をこそ 神とするように、ということ。
  - ②そのようにして、私たちが死に至らないで いのちを得るように、ということ。
  - ③そして、隣り人のいのちもまた 大切にするように、ということです。
- ・そうであるなら、それはいったい、誰の心に通じるものか。そして、誰を指し示し、誰のもとに導くものと言えるでしょうか。
- ・イエスは46節で、「モーセは、わたしについて書いている」と言っておられます。
- ・このように、律法の戒めが意図した本来の意味を見失ってしまったユダヤの人々。その彼らに向かって イエスが言われたのが 45 節の言葉でした。すなわち、モーセの真意を忘れたあなたたちは、頼りにしている その当のモーセによって訴えられるであろう、と。

**「あなたたちの内には 神への愛がないことを、私は知っている」(42)**

- ・ユダヤの指導者たちのこうした姿を見て、イエスは「あなたたちの内には 神への愛がない」と指摘されます。
- ・いかにも厳しいこの言葉は、彼らのどんな心の内を イエスが見て取られたからでしょうか。イエスにこのように言わせた、彼らの問題の中心とは？

**「わたしは、人からの誉れは受けない」(41)**

**「ほかの人が自分の名によって来れば、あなたたちは受け入れる」(43)**

**「互いに相手からの誉れは受けるのに、唯一の神からの誉れを求めようとしない**

**あなたたちには、どうして信じることができようか」(44)**

- ・加えて、ユダヤでは当時、メシアを自称する人間も次々と現われていました。
- ・彼らは気前のいい神を説き、ユダヤ王国の復興やこの世的な繁栄・成功を約束しました。いわゆる <sup>ごりやくてき</sup>御利益的な幸福宗教です。
- ・そして、「(ほかの人が) 自分の名によって来る」(43) そうしたメシアを、人々は少なからず歓迎したのです。
- ・それは、彼らが何を愛したからでしょうか。

- ・また、そうした人々にとって、十字架の死へと歩むイエスはどのように映ったでしょうか。
- ・このように、一方では、聖書の知識を誇示し、見た目の信心深さで己が名を高める。また一方では、メシアを自称し、人々の人気取りに腐心する。そこにいたのは、そのような人たちでした。
- ・そこに共通するのは はたして、何でしょうか。そして、そこで 何が問題だと、イエスは言われるのでしょうか。
- ・「人からの誉れ」(41)、「相手からの誉れ」(44)、「唯一の神からの誉れ」(同) をキーワードに考えると・・・。

「わたしには ヨハネの証し<sup>あか</sup>にまさる証しがある。

父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業<sup>わざ</sup>、つまり、わたしが<sup>おこな</sup>行っている業そのもの  
のが、父がわたしをお遣わしになったことを証ししている。

また、わたしをお遣わしになった父が、わたしについて証しをしてくださる」(36、37)

「わたしについて証しをなさる方は別におられる」(32)

・ということで、御自身についての証し<sup>あか</sup>は 突き詰めれば結局・・・と、イエスは言葉を加えておられます。

・それは、

①「父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業<sup>わざ</sup>」(36)、すなわち「わたしが<sup>おこな</sup>行っている業そのもの」(同) であり、また

②「わたしをお遣わしになった父」(37) が私についてしてくださる その証し<sup>あか</sup>である、と。

②については、「わたしについて証しをなさる方は別におられる」(32) と別言してもおられます。

・これらについて、いま少し具体的に言い表わすと、それぞれ どんなふうに言うことができるでしょうか。

①・・・とは 要するに、何のことで、その特質とは？

②・・・とは つまり、どういうこと？

・イエスを神の御子<sup>みこ</sup>と告白させるのは、詰まるところ、この二つの証し<sup>あか</sup>に拠るといえるのですが・・・。

「しかし、あなたたちが救われるために・・・」(34)

・こうして、ユダヤの指導者たちの有りようを批判されるイエスですが、が同時に、「しかし、あなたたちが救われるために・・・」ともおっしゃっておられます。

・彼らに対するイエスの真意はどこにあるのでしょうか。

・また、私たちに対するイエスの思いとは？

・そして、イエスがこの私たちに期待しておられることとは？

・私たちの希望は、はたして どこに？